

わが心の自叙伝

菅原洋一

▷17

コンサートで熱唱する筆者

1967（昭和42）年9月、サンケイホールで初リサイタルが行われたころ、歌謡界における、いわゆる暮れの賞レースや「紅白歌合戦」の話題がまたに流れていた。

前年までは全く無縁な話だ。時たまふるさとに帰って、父親と風呂に入り背中を流している「ぼつりとおまえはいっつ『紅白』に出るんだ？」などと言われていたものだったが、この年は自分も候補に入っていると聞き、信じられなかった。私が所属していた小澤事務所も当時は「紅白」や「レコード大賞」などとは縁遠かったから、社長も「もしうちの事務所から出場者が出たら逆立ちして歩くよ」なんて冗談を言っていたくらいだった。現に「知りたくないの」は発売して2年も売れなかったのだから平気だった。それが今年には有力だという。

◆ 紅白初出場

「レコード大賞」は石原裕次郎、フランク永井、北島三郎らとともに歌唱賞の男性歌手候補数名の中にノミネートされていた。最終的には「君こそわが命」の水原弘が受賞したが、なんと私はわずか数票差で第2位に付けたのだ。しかし歌唱賞は男女一人ずつだ。「紅白」もこんな結果に終わるのかな？と内心思っていた。だからレコード会社を通じて出場のお知らせが届いたときは、正直胸が震えたものだ。

これで親孝行ができた。ところが出場決定後、困ったことが起こったのだ。「出場できたら逆立ちする」と言っていた小澤社長は実際は逆立ちなどできない



かったのである。周囲からは「やられて結局私が代わりに逆立ちすることになってしまった。うれしい、ほのぼのとした、懐かしき思い出だ。」

当時の年末スケジュールによれば12月27日に熱海で歌い、翌28、29日は四国の高知、30日は私を育ててくれた東京のホテル高輪に出演し、大みそかを迎えている。会場の東京宝塚劇場では朝からリハーサルが行われ、夜9時、ついに「紅白歌合戦」

はスタートした。紅組の伊東ゆかりが大ヒット中の「小指の想い出」を歌い終え私の出番がきた。男性軍の10番手だった。

司会の宮田輝さんが私の紹介を始めた。「『セリフは歌え、歌は語れ』と言います。それはこの人のためにある言葉じゃないでしょうか。菅原洋一さんです。」

後の年まで22年、私は毎年「紅白」とともに年を越すことになる。

翌68（昭和43）年は新年から横浜宝塚劇場でのファンションショー、翌日には広島でのNHKテレビ出演と目まぐるしかったが、そんな中、1月15日に故郷兵庫に近い、大阪・サンケイホールでの初リサイタルが開かれた。両親や親戚友人たちに「紅白」出場報告のお土産とともに、歌を聞いてもらえたのだ。ほかの場所でも歌うときはまた違った特別な思いが去来したものである。この年は自宅に帰る暇もないほど全国を駆け巡り、本当にあつという間に年末が近づいていた。

2年連続出場できるかという「紅白」と前年惜敗した「レコード大賞」の時期だ。一年間の実績を認めてもらえるかどうか胃が痛くなるような思いの季節が、到来していた。（すがわら・よついち＝歌手）

「セリフは歌え、歌は語れ」